

東日本大震災後の福島における 国語科教育モデルの構築に向けて 震災体験の想起、表現及び教材化をめくって

高橋 正人

1 はじめに ～震災の記憶 / 想起と忘却の狭間で～

東日本大震災の記憶を迎える時、必ず目に浮かぶシーンがある。それは、海水浴場としても有名ないわき市永崎海岸から数十メートルの地点にあるいわき市立永崎小学校の校庭の姿である。校門のそばに佇む二宮尊徳の幼少時代を刻んだ石像が、台座から離れ、校庭に直に立っている。永崎小学校の児童にとって、その像は普段見慣れたものであったはずである。津波の勢いによって台座からもぎ取られたまま水中で横倒しになっていたであろう像を、津波が引いた後に台座の下に立て直した方の思いが伝わる。



多くの犠牲者を出した東日本大震災の様子は、津波の襲来する映像とともに繰り返し私たちの目にその恐ろしさを刻み込んできた。一方、自然の猛威にもかかわらず、いやむしろ自然が猛り狂えば狂うほど、むしろその自然を愛おしむ気持ちが浮かんでくるという矛盾した心情を感じることもある。

山折哲雄(2011)は、東日本大震災に関して次のように述べている。「3・11の惨害は、はるかに歴史をさかのぼる、あの神話的な物語を私に思いおこさせる機縁になったからだ。古代的な物語といってもいい。その物語に、2つある。1つは周知の「ノアの箱舟」の物語、もう1つが「三車火宅」の物語である。前者は、『旧約聖書』冒頭の創世記に顔を出す。後者は『法華経』第三章の『譬喩品』に登場してくる。いずれも、人類が二千年、三千年の時間をかけて語り伝えてきた、年輪のつまった物語だ。」ここで述べられているように、被災地とりわけ浜通りを始めとする福島県の置かれている災禍の状況は、まさに水と火によってもたらされた災禍そのものと言える。人間の営みは極めて不確かなものによって支えられていると言っても過言ではない。パスカルの『パンセ』の一節を指摘するまでもなく、人間の存在は、私

たちを取り巻く世界、宇宙の中でごく小さなものでしかない。しかも動的なものの中に静的なものが一時的に安定の形をとって乗っているに過ぎない。自然災害の狭間に生きることを強いられている人類のある意味宿命的な在り方がここには提示されている。

震災体験は到底一括りにはできない。今生きている人のみならず直接、間接を問わず震災によって生命を失った多くの人たちの無念の思いは理性や言語で表現することは困難である。表現可能な幾ばくかの部分以外は、むしろ無意識のうちに沈殿した幾層にもわたるアモルファスな様相を呈し、混沌とした中にも巨大なエネルギーを蓄えたまま存在する。そして、それらの形になりがたい不定形な体験の全体は、記憶の「海」の中に姿を留め、想起され、語られ、表現されることを待っている。体験の深層に滞留している思いを表層への誘引によって明らかにするためにはエネルギーが必要である。震災体験は五感によって感得されるものだけでなく、五感を超えたものとの交感により、身体と精神とを新たな世界の中に私たちを投げ入れ、すでに世界に「乗り込まされた」(パスカル)ものとする。

震災体験を振り返るためには、一定の時間と空間、そして、心的距離が必要となる。生命に関わる体験としての東日本大震災を語る時、今を生きる現在に侵食するように過去がリアルな現在形として嵌入し、希望を語る未来が現在と断裂し、後悔や無力感が仮定法によって想起されるなど複合的な心的機制が働き、それらは「想起の文法 / 語りの文法」を求める。震災体験は、「語り / 語られる」ことによって、五感とそれを超える混沌とした複雑極まりない世界そのものにその都度新たな命脈を見出し、想起により新たに発見され生成され続ける。震災体験を想起し、身体を含め生命全体に刻印された記憶の中から感じたことや考えたことを紡ぎだすとともに、それらを伝えることによって新たな物語が生まれる。しかも、堀内正規 (2015) が述べているように、「かえって、誰のためにでもなく、まずは自分を得心させようとして孤独に書かれたことばの方が、不特定の、地域も時代も超えた読者に届くことができる」と言える。

また、座小田豊 (2012) が「筆舌に尽くしがたい苦しみや悲しみにことばを与え、それを自己の不可分の一部をなす『物語』として受け容れることによってはじめて、人は自分を取り戻し、『今を生きる』ことができる。それは限りなく個別的な『体験』を、ことばによって普遍的な『経験』へと昇華させ、次の世代へと語り継ぐ作業でもある。言い換えれば、『物語る』という言語行為は、個人の記憶や経験をことばに象ることによって共同化し、それをコミュニティの記憶や経験として蘇生させる不可欠のメディアにほかな

らないのである。」と述べるように、個別的・個人的・刹那的な震災体験を言語として表現化することによりそれらは普遍への飛翔を果たす。さらに、赤坂憲雄（2014）の指摘するように、「物語りすること」は「魂鎮め」となる可能性を秘めている。

本稿では、震災体験の記憶を想起し表現することと、震災体験を伝えることの意味を考えるとともに、それらを通じた教育ネットワークと国語科教育モデルの可能性について考察を加えたい。

2 児童生徒の被災体験記録から ～書くことと癒しをめぐって～

東日本大震災に関する記録は「映像系情報」と「文字系情報」とに大別できる。テレビはもとよりYouTubeなどの映像は圧倒的な力で私たちの目に空前の規模としての災害の様子を容赦なくしかも現実とは思えないほどの仮借なさをもって迫ってきた。一方、多くの記録に残された文字情報には、人としての無力感を始め人としての思いを様々な観点から掬い上げたものが多い。福島県小学校長会（2013）による『東日本大震災記録集 ふくしまの絆～学校は、復興の最大の拠点～』の中で、当時のいわき市立永崎小学校の児童は次のように当時を振り返っている。

3月11日、家へ帰ると、テレビは地震と津波が来ることばかり報道していました。私の家は高いところにあるのでそこから見てみると、津波によって車やトラックが次々に流されていきました。その日の海は、いつものおだやかな海とまったく違っていました。（永崎小学校6年Sさん）

ここには、素朴でありながら佐藤弘夫（2012）が述べるように「大人でさえも座標軸を失って」しまいそうな激しい地震に翻弄される幼い子どもの姿が映し出されている。

また、原発事故により相双地区から避難を余儀なくされた様子については同書から次のような状況が表現されている。

ぼくは、この東日本大震災と原発事故が起きて、いろいろなことを経験しました。例えば、大熊町の人や同じ町内の大野小学校の人と仲良くなったのはいいのですが、逆に、大事な友達が、ぼくとちがう学校に行ってしまったのは残念でした。ぼくとその友達は、いっしょの避難所だったのに、何でだろうといつも考えています。大震災当日の3月11日には、学校から少し離れた大熊町スポーツセンターに避難しましたが、ぼくの家族は、どうしたのか、その時にはむかえに来てくれませんでした。でも、その時も友達は、一緒にぼくの家族を待っていてくれたのです。

(熊町小学校6年Sさん)

生は、生命活動そのものとしての相と、いわゆる社会的な活動などの相とに分けて考えることができるが、故郷を離れ全く知らない地域に移り住まざるを得ない体験は、その両方の相において一般の大人にとっても大きなストレスを伴うものであり、幼い小学生にとって苛烈を極めた出来事の連続だと推察される。こうした不条理な状況に置かれた自分と周囲の世界との齟齬を幼い中で感じ取っている表現がここにはある。幼・少年期から青年前期・後期にかけての多感なそして人生の姿に思いを馳せることが可能となる年代に差ししかかかっている子どもたちに、震災そのものが直に「問い」を突き付けている。自分とは何か、世界とは何か、自然とは何か、そして、生きるとは何か。こうした一連の答えのない「問い」に対して子どもたちは生きること、生き続けることによってしか答える術がないようにも思える。しかも「問い」は宙づりのままである。

福島県教育委員会(2015)は、「ふくしま道徳教育資料集」という形で児童生徒・教職員の想いを冊子に残している。ここに収録されている文章には多くの児童生徒が体験の重さを自らの中で振り返り、現実の出来事として受け止め、さらにはそこから自らの深い洞察をもって対峙している姿が看取される。大切なことは、子どもたちが実体験を振り返り自ら視点を拡大したり移動させたりすることにより体験全体を包括しようとする意志を持つ契機となったということである。書くということ、表現しようとすることは、自らの体験を振り返り新たな自己を創造するうえで重要な契機となっている。

次に引用するのは、同書第 集所収の「モラルエッセイコンテスト」に掲載されている中学生の文章である。「記憶」と「想起」によって海という対象への接し方や感情が変化している様子が丁寧に叙述されており心を打つ。

私は海が好きだ。晴れた日の静かな海はもちろん、雨の日の荒波の海も好きだ。季節によって表情を変えて、空の色が似合う海が私は好きだ。私の家はかつて海のすぐとなりであり、窓からは海が見えた。海とともに小学生時代を過ごした。あの時、毎日聴いていた波の音は今でも思い出す。みんな、海とともに生活していた。あの日、その海が恐怖となるまでは。あの日以来、その恐怖を体験した誰もが、もう海なんて見たくないと思っただろう。その海に、家も庭もごく普通の生活も奪われてしまったわたしと家族も同じだった。誰がやったわけでもない悲しみを怒りをどこへぶつければいいのかもわからない。私たちは、海を美しいと思うことも忘れてしまった。(中略) 悲しみは時間の流れが解決するという。私の、海が好きだという気持ちを取り戻してくれたのは、確かに

私の思い出の中にあった海なのである。思い出すことを避けては、海はいつまでも恐怖のままだ。そっと目を閉じてみてほしい。そうすれば、どこかで海を美しいと感じる自分に出会える。そして、きっとまた、海を好きになる。(いわき市立小名浜第一中学校3年Yさん)

「あの海」と題されたこの文章の中で特に注意したいのは、「時」を「癒し」あるいは「成長・変容」のための大きな力を有しているものとして捉えていることである。相貌を変える「海」の存在を対象化する中で省察しようとする態度である。悲しみの海が癒しの海へと変貌する契機となったものは、今を生きようとする強い意志と時の力によるものと考えられる。

次に高校生の場合を見てみたい。福島県立浪江高等学校(2012)の例を示している。

テレビで他人事と思っていたことが、現実には起こるとは思わなかったので、今でも信じられないです。信じたくないです！それに原発事故によって、大切なものが奪われて、避難所を転々と移動しました。戻ったら最初に、猫のお墓を建てたいと思っています。今は何もできないけど、いつか浪江町が復興する時には戻ってきてお手伝いをしたいと思います。そして、また浪江町で生活したいです。くうちゃん、今までありがとう。助けてあげられなくてごめんね。(浪江高等学校2年Sさん)

日常生活にどのような試練が待ち受けているかを知らない時点での生徒の思いの表出にはある意味で素朴な感情が吐露されている。「今でも」「すんだのに」「戻りたい」「ごめんね」など、想起することが痛切な悔恨を呼び起こす。また、同書には、文法的にも過去、過去完了、仮定法過去、未来、未来完了、未来完了進行形などの時制(テンス)や、「もしあの時にこうしていたならば」などの法(モード)によって大切なものを失った喪失感や絶望的な心の状況が如実に表現されている。喪失感は年齢によってその大きさが異なる。若い人にとっての災害の受け止めと年齢を重ねた人にとっての受け止めはそれまで生きてきた歳月の中での経験知によってその全体像に含まれる大きさが異なるからでもある。

これまで見てきたように、震災体験は外的変容を伴うとともに、個人の内的変容を惹起することとなる。

震災体験の影響は強く、社会の外的な変容をもたらすのみならず、一人一人の人生そのものの内側からの変容を強いるとともに、一過性ではなく持続的に人生そのものに影を落とすことにもなる。ある意味で「震災とともに生きる」という宿命を私たちは負うことになる。震災という事態をその負の側面からだけ眺めるのではなく、正の側面からの視点へと転換を図る上で体験

を自己の内面において受け止めることが1つの出発点になる。東日本大震災はその時間を共有した一人一人にとって同時代を生きていたという感慨をもたらすとともに、その瞬間を起点とした同心円的な広がりを持つ「時の年輪」を一人一人の人生の中に刻み込むことになる。

3 地域におけるネットワークモデル ～Shirakawa Weekの取組み～

これまで見てきた個人の体験を縦系とすると、震災を体験した人たちの相互交流による体験は横系として捉えることができる。

遠藤健（2014）が中心となって白河市を舞台として行われたShirakawa Weekは、学校が夏休みになる二週間、白河、福島出身の在京の大学生・社会人と白河の子どもたちが交流する期間として実施された。遠藤は、取組みの趣旨について、「未来を志向し、切り拓いていくことは、とても重要ではあります。しかし、それと同時に、視点を反転させ、辿ってきた道程を意味づけることも同時に未来を創っていくことだと信じています。そして、それが『震災以後』を生きる自分の役割であると考えています。」と述べている。

また、平成26年9月に行われた「阪神地域先進市民活動視察」の報告書において、主催者である青砥和希氏（首都大学東京大学院地理環境科学域）は、「防災教育パラドックスを越えて」と題した提言の中で、東日本大震災を経験した福島、特に県南地域で活動を展開するに当たって重要な視点として、正しく構造を認識すること、過去と地域に学ぶこと、そして、制度設計段階



から若年層が関わる取組みを実践することを挙げている。氏は、中高生の時期に東日本大震災を身をもって体験した世代が中心となって防災意識を継承することの重要性とポスト東日本大震災の社会に向かうために、阪神・淡路大震災の経験から学び、自分たちの地域から学ぶ必要があることを述べている。こうした体験により形成されたネットワークは、震災の直接の体験を経っていない者が他者を慮ることにつながり、知見の拡大に資するものと考えられる。

4 地域におけるネットワークモデル ～PTAによる交流の取組み～

地域間の相互交流もまた重要なネットワーク構築につながる。平成28年7月30日と31日の両日にわたって東京都公立高等学校PTA連合会主催による「高校生被災地視察ツアー」が開催された。東京都の高校生が自らの目で津波及び原子力発電所事故の現場近くを具に見ることによって被災地の現状を

把握するとともに、その知見を自らの体験として語ることによって被災地と東京という2つの生活圈相互のネットワークが構築された。

被災地に来て、20キロメートル圏で原発の音が聞こえるということに驚いた。また、消防・防災センターの見学や街並みをバスの中から見学して、どれ位の高さの津波が来たか、そこが今どうなっているのか、実際に自分の眼で見るのが大切だと分かった。（「都高P連会報第81号」）

被災地を訪問することによって東京都の高校生の中で起こった心的変化は、自己対話の形をとったり、他者との対話の形をとったりするなど形態に相違はあれ、被災地をめぐる「対話」を形成し、現時点のみならず今後一人一人にとって「過去との対話」あるいは「未来との対話」という形に収斂する。重要なことは、「対話」ということばによるやりとりが思索を深め相互の思いを積み重ねる契機となっているという事実である。

また、平成25年度から始まった「福島・水俣交流事業」については、福島県PTA連合会が平成23年11月の熊本県PTA研究大会「みなまた大会」に招待されたことを契機として、福島を応援したいとの水俣市の人々の温かい気持ちももととなり開始された。福島、東京、熊本など地理的に遠く隔たった生活圈で暮らす中学生が実際に現地に赴きその場に立つという臨場の経験を踏むことにより、単なる知識ではなく肌感覚をもって現地の今を感じ取り、相互交流によりネットワークを築いたという事実は重い。双方の地において派遣と受け入れを行うことにより経験知が蓄えられ、見聞きしたことを他の人に伝えることにより、さらに知見が広がっていくことが期待される。

5 経験の内化としての教材 ～震災体験の教材化の試み～

記憶は集団的な記憶と個人的な記憶とに大別することができる。また、対話形式には自己対話と他者との対話との2つがある。震災後に文章を書く機会を得た生徒にとって、個人的な体験と再び対峙することとなった震災作文は心の傷を癒す働きとなる場合もあれば、むしろ心に大きな負担を齎すことになった場合もある。一概に文章化することの功罪を断定することはできない。ただ、多くの場合には、自己対話が進み、自分にとって生きることを深く考える契機となったものが多い。さらに、「あの時、あの場所で」という一回性の体験が、様々な体験を経た後に行われる想起により内面的に深まり、認識の変化を生じる。

東日本大震災に関わる一人一人の経験は発達段階や各自の置かれた状況の中でその相貌を異にしている。しかも、震災体験そのものは、時の流れの中で変化し、ある時点での体験の意味が、時を経ることにより熟度を上げ、い

わば天啓ともいふべき形で一人一人の内面に啓示を与えることがありうる。こうした変貌を遂げる可能性を有した体験を他者との交流の中で教材として学びの中で形象化することは困難を伴うが、意義深いものと考えられる。

また、一方、東日本大震災については、これまで数千を超える書物が刊行されるとともに、震災遺構や各種デジタルデータとして当時の様子がリアルな形と映像として残されている。そうしたものを後世に継承することも東日本大震災を経てきた我々の使命と考えることもできる。さらに、震災等に関する文献や資料は多く残されており、それらの価値は今回の東日本大震災においても多くの示唆を与え、いかに先人の知恵が我々にとって忘れてはならないものであるかを示している。古典から近代作品にわたるまで時代の中で価値を付与された多くの作品群が震災を契機として今後も編まれるとともに、価値の再発見を通して教材としての命脈を保つことが求められる。

教材化にあたっては、歴史や伝統、文化等の地域性、経験の独自性・一回性、経験の普遍性などの視点を考慮することが重要である。また、教材として収集されるものとしては、日常生活に関わる思いを綴ったものや文芸作品として描かれたもの、科学的知見に関わるもの、新聞やテレビなどの報道関係素材、音楽・美術・写真・映画・演劇・映像・アニメなど芸術作品全体に関わるもの、さらには、翻訳された他国の情報、地図、データ、ニュース原稿そのものなど多岐にわたるアーカイブス化されたものを視野に入れた広範なものが想定される。

また、教材発掘及び教材編集においては、「テーマ型教材配列」も1つの方法である。例えば「津波」というテーマをもとに、日本各地の過去の事例、世界各地の事例、被災状況、防災及び都市計画、地域産業、情報伝達、医療福祉、産業構造など総合的な知見を持ち寄り、そこから津波に対する今後の対応の在り方について深く考える契機とすることが可能となる。さらにそうした内容を編むことにより、実際に津波を経験した者の立場からその現象を捉え直すというプロセスを確認するとともに、自然災害と人間との関係を《人類史的なスパン》で捉えることが可能となる。

【津波をテーマとした教材内容の一例】

科 学	地震と津波のメカニズム、津波の物理的エネルギー、河川遡上メカニズム、地理的な考察、リアス式海岸、水理学、千年に一度、地震予測学への挑戦、二次災害防止、原発施設の安全確保、廃炉工程、新エネルギーへの移行、防災シミュレーション等
防 災	防潮システム、交通網の寸断、物資輸送の経路確保、二次災害、風評被害、復旧・復興工事、嵩上工事、高台移転、鉄道網の整備、交通遮断回避、危機管理システム、個人における防災意識、忘却との闘い、マスコミと防災等
産 業	漁業被害、養殖等の沿岸産業の衰退、原発関連、廃炉、AI、農林水産業、ロボット産業、放射線治療、ドローン、風評対策、電力とエネルギー政策、備蓄関連、防災グッズ、防災情報システム、危機管理体制等
精 神	恐怖感、喪失感、怯え、退行現象、甘え、祈り、レジリエンス、諦め、不安、フラッシュバック、風評、生と死、喪失感、再生への意志、記憶、想起、身体、意識、回復、身体表現、回復物語、地域間交流、神社仏閣、歴史的知見、ルポルタージュ、詩集、提言、記念碑等
再 生	土地の記憶、人とのつながり、祭礼や舞踊、冠婚葬祭、祝祭の伝承、支援の輪、死者への弔い、都市計画、防潮堤・防波堤、防災システム、震災遺構、記憶遺産、ダークツーリズム、イノベーションコースト構想、ロボット産業等
教 育	津波学、地域学、故郷学、土地の歴史と伝統、放射線教育、防災教育、減災教育、風評被害防止のメカニズム、震災関連いじめ防止、十代の危機管理入門、防災の日、周年感情、距離感、皮膚感覚、地図思考、思考図、思考儀等

津波以外にも、様々なテーマが考えられるが、東日本大震災を契機として産業の在り方、人間の在り方、エネルギーの在り方、防災の在り方、社会の在り方や今後予想される新たな災害への対応など広範なテーマにより、過去に学び、過去から未来への橋渡しをすることが求められる。

また、三野博司（2012）が述べているように、共通の土台となる文学作品を知ることが時と所を超えて生まれる共感と連帯と未来への歩みを共有する上で有効なものとなる。例えば、夏目漱石『それから』、寺田寅彦『津浪と人間』、柳田国男『遠野物語』、宮沢賢治『グスコブドリの伝記』、吉村昭『三陸海岸大津波』などの多くの作品が震災を通して私たちに語りかけてくる。

さらに、教材の作成に生徒自身が参画することにより生徒自身が震災の経験の風化を食い止めるとともに、後世に向けて主体的に発信することによ

て自らが果たすべき使命を深く自覚することが期待される。震災だけでなく日々の日常的な様々な出来事や事象についての基本的な知識を獲得するとともに、それらの課題に対して原点に立ち返り自らの思考を確立するための「問いかけ」や「対話」を重視し、主体的・協働的に学び合う力を身に付けることも重要になる。

6 小・中・高・大の国語科ネットワーク構築 ～成長するネットワーク～

東日本大震災は稀有な災害であったが、起きたことの「意味」は、我々一人一人が見出すしかない。福島県の児童生徒にとって東日本大震災を契機として大きく世界がその相貌を変化させられた今こそ、発達段階に即した独自の教材開発と教材をもとにした知見の拡大・深化によって豊かな心を持ち、逞しい身体と確かな学力を身に付けることが求められる。このために必要なことは、小・中・高・大を通した一貫性のある教材プログラムの作成とその実践にあると考えられる。大切なことは、子どもたち一人一人の成長に即した柔軟かつ可変的なネットワークを形成することであり、記憶としての東日本大震災を超えて、世代としての共通認識を形成する「震災世代」としての記憶や意識の共有化を図ることである。東日本大震災発生時において小学4年生であった児童は現在中学3年生に、中学1年生であった児童は、現在高校3年生に達している。小学校・中学校・高等学校という校種を超えて成長している子どもたちにとって、私たちが考える以上に極めて大きな影響を東日本大震災から受けていると考えられる。したがって、震災に対する受け止め方も一様ではなく、地理的な位置によっても大きく異なるものと言える。こうした世代進行を伴い進化するネットワークを「ふくしま型ネットワーク」と呼びたい。

ここで大きな役割を果たすのが「テキストを通した成長」という視点である。東日本大震災を直に体験したことをもとに、一人一人が成長する過程そのものの中で自らの思考力を鍛え、人的交流や情報交換を行うことにより思考の深化と錬磨を経ることが成長の証であり、震災を克服することにつながる。重要なことは、時間の流れの中で変わるものと変わらないものを見分け、児童生徒の視点に立った「成長・生成する教材」編集と授業実践により、個の成長とそれを見守り共に成長する教員との相互ネットワークを積極的に形成していくことである。多感な、そして、思考が深まる成長期にある児童生徒を核としたネットワークは、東日本大震災を知らない未来世代への架け橋となる希望のネットワークとして機能することが期待される。1995年（平成7年）1月17日に発生した大規模地震災害である阪神・淡路大震災で被災

した多くの若者が新たなボランティア元年として記憶されるように、東日本大震災もまた、後年、「震災世代」として新たな復興の物語を紡ぐことになる。

7 おわりに ～学ぶことによって未来とつながる～

福島県では東日本大震災からの復興を目指してこれまで「東日本大震災の体験談と復興への想い」を広く県内外から募ってきた。次に掲げるのは、「ふくしまの未来へ2015～3月11日知事メッセージ～」に引用された稿者の一節である。

ふくしま創生の物語が、今、始まる。

学ぶことこそが、未来を創造する。

学ぶことによって私たちは未来とつながることができる。

東日本大震災という災禍のかげに一人一人の物語が静かに編まれている。国語科において学ぶべきものとは、ことばを通して自らの命が稀有の存在であり、そのありがたさや自然の中で生かされていること、そして、他者と真摯に向き合うことの重要性を感得することに他ならない。東日本大震災を経て、我々は亡くなった多くの方々の思いを体して未来を生き抜くことを決意した。日本に住む者にとって自然災害と無関係に生活することは不可能とも考えられる。いわば災害との共生によってのみ私たちの生は持続可能となる。こうした中で、震災をめぐるテキストを介し未来という時空に向かって生き続ける一人一人にとって希望となるであろう灯台の灯が点されることが、震災で命をなくした人たちへの鎮魂につながるものとする。

文献

Connerton, P. 2011 芦刈美紀子訳 『社会はいかに記憶するか』（新曜社）

Halbwachs, M. 1989 小関藤一郎訳 『集合的記憶』 行路社

青砥和希 2014 『阪神地域先進市民活動視察報告書』 Shirakawa Week 実行委員会

赤坂憲雄 2014 『震災考 2011.3-2014.2』 藤原書店

遠藤健倫 2014 『Shirakawa Week 2012-2013』 ～記憶を未来へ～

大澤真幸 2012 『夢よりも深い覚醒へ - 3・11後の哲学』 岩波書店

座小田豊 2012 『『今を生きる』ということ』 座小田豊・尾崎彰宏編 『今を生きる～東

日本大震災から明日へ！復興と再生への提言～1 人間として』 東北大学出版会

佐藤佐敏 2013 『思考力を高める授業作品を解釈するメカニズム』 三省堂

佐藤佐敏 2016 『5分でできるロジカルシンキング簡単エクササイズ』 学事出版

佐藤弘夫 2012 『死者からのまなざし 生きること・生かされること』 座小田豊・尾崎

彰宏編 『今を生きる～東日本大震災から明日へ！復興と再生への提言～1 人間

- として』東北大学出版会
- 高橋正人1996「存在の基盤としての大地 ～『それから』における地震と崩壊とをめぐって」解釈学会編『解釈』第42巻第1号
- 高橋正人2016「思考図から思考儀へ～参照体系を通した思考力育成の試み～」福島大学人間発達文化学類編『福島大学人間発達文化学類論集第22号』
- 高橋正人2016「ポタニカル・アクティブラーニングの試み～高等学校国語科における思考力の育成をめぐって～」全国大学国語教育学会編『国語科教育研究第131回東京大会研究発表要旨集』
- 東京学芸大学編2013『東日本大震災と東京学芸大学』東京学芸大学出版会
- 東京都公立高等学校PTA連合会編2016『都高P連会報』第81号東京都公立高等学校PTA連合会調査広報委員会
- 東北大学方言研究センター2012『方言を救う、方言で救う～3・11被災地からの提言～』ひつじ書房
- 福島県小学校長会編集2013『東日本大震災記録集 ふくしまの絆～学校は、復興の最大の拠点～』
- 福島県中学校長会編2012『東日本大震災を越えて ふくしまを生きる～福島県中学校長会からの報告～』
- 福島県中学校長会編2014『震災体験が切り拓いていく教育 凜と生きる～私たちの責務～』
- 福島県教育委員会2015『ふくしま道徳教育資料集 補訂版 全3集』
- 福島県PTA連合会編集2016『福島は歩みだす～福島・水俣交流事業記録集～』
- 福島県立浪江高等学校編2012『幸あるわれら～3・11東日本大震災と原発事故災害の体験記～』
- 福島県立浪江高等学校津島校編2012『五山に囲まれて～あの時を忘れない～』
- 福島大学うつくしまふくしま未来支援センター編2014『福島大学の支援知をもとにしたテキスト災害復興支援学』（八朔社）
- 堀内正規2015「被災者と詩の言葉」鎌田薫監修・早稲田大学・震災復興研究論集編集委員会編『震災後に考える～東日本大震災と向きあう92の分析と提言～』早稲田大学出版部
- 三野博司2012『震災とフランス文学』三野博司編著『大学の現場で震災を考える～文学部の試み～』かもがわ出版
- 山折哲雄2011「二つの神話と無常戦略」河出書房新社編集部編『思想としての3・11』河出書房新社
- 吉村昭2004『三陸海岸大津波』文藝春秋社
- (たかはし・まさと 福島県高等学校PTA連合会事務局長)